



Title	蠟山昌一を惜しむ
Author(s)	林, 敏彦
Citation	国際公共政策研究. 2004, 8(2), p. 177-180
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4906">https://hdl.handle.net/11094/4906</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 蠟山昌一を惜しむ

放送大学教授

スタンフォード日本センター理事長

林 敏 彦

2003年6月19日、国立高岡短期大学学長の蠟山昌一が亡くなった。アウトドアを好み、グルメで、偉丈夫で、エネルギーにあふれていた蠟山昌一が、生存率50%といわれる難病間質性肺炎にとりつかれ、終に生還できなかった。

2001年11月、日経新聞のコラム「交友抄」に蠟山昌一のことを書いた。編集者はそれに「あこがれの同士」という見出しをつけてくれた。原稿にはこう書いた。「私は役目柄蠟山さんの名誉教授功績調書を書いた。彼の追悼文も何とか私が書きたいと思っている。」本音だった。編集者は私の意図を分かってくれた。でも、縁起でもないと思う読者もいるでしょうね、とも言った。そうだろうな、と思った。結局この一文は削除した。

蠟山昌一は私のあこがれの人だった。85年大阪大学からの移籍の誘いに、私は二つ返事で飛びついた。一つには自宅を引っ越さなくてもよかったから、もう一つは蠟山昌一だった。その頃、蠟山昌一は助教授の兄貴分で、中谷巖、本間正明、猪木武徳、宮本又郎といった助教授らに慕われ、大学の内外でさっそうと振る舞っていた。

蠟山昌一の研究室や書斎は本で足の踏み場もなかったが、彼は書齋派の学者ではなかった。自らを「(アカデミックな) やくざ」と呼ぶ蠟山昌一は、「経済学」学を最も忌み嫌った。経済学部を提供科目の名称から「学」と「論」を取り去ったのも彼である。金融論ではなく金融を、財政学ではなく財政を、教育と研究の対象にすべきだと主張した。けれども彼は、理論研究に対しては満腔の敬意を払った。

蠟山昌一の叔父上は大政治学者の蠟山政道で、蠟山家は群馬県安中市の造酒屋の出身だった。私の妻の母方の祖父で経済学者の大塚一朗も安中の造酒屋の出身で、二人は親友だったという。上州の遠い親戚同士が親友だったという、ただそれだけのことで私はいっそう蠟山昌一に親しみを感じていた。

国際公共政策研究科が立ち上がる少し前、蠟山昌一は再婚した。洋子さんは私の研究室で秘書をしていていた。帰路私の車に同乗した彼女は、「蠟山先生と一緒にいると、なんだか

落ち着きます」と告白した。蠟山昌一は「俺は、彼女にふさわしくない」とたじろいだ。天下の蠟山が洋子さんの前で小さくなっていた。二人は神戸で結婚式を挙げ、私はそのパーティの司会を務めた。あれからまだ10年しかたっていない。

2002年の夏、金融システムの専門家だった蠟山昌一は、破綻した日本の金融システムの再生プログラムに心血を注いでいた。高岡短期大学の学長として大学の合併と独立法人化を陣頭指揮しながら、土曜日も日曜日もなく霞ヶ関の金融庁に通い詰めた。それが蠟山昌一の命を縮めることになったのかどうかは分からない。

## II

2003年9月1日には、有志の発起人の呼びかけで「蠟山昌一さんを偲ぶ会」が開かれた。サントリー文化財団が万端の準備をしてくれて実現した会だった。

偲ぶ会は、蠟山さんの交友の広さと人徳を反映して、なごやかで心のこもった品格のある会となった。因果なことに私は、今度は蠟山昌一さんを偲ぶ会の司会を務めることになった。

発起人代表の猪木武徳教授をはじめとして、思い出を語る友人識者の言葉は、一人の例外もなく慈愛に満ち、故人への感謝と敬意にあふれていた。書かれた原稿を棒読みする出席者など一人もいなかった。厳しいスケジュールをやりくりして、竹中平蔵大臣も駆けつけてこられ、蠟山先生に政策研究の手ほどきを受けたおかげで、現在苦勞させられている、と出席者の笑いを誘われた。国会やマスコミ向けの答弁とは違って、メンターに惜別の言葉を述べられる姿は、袂を脱ぎ捨てた個人としての竹中平蔵のそれだった。

## III

蠟山昌一の専門は「金融」だった。蠟山昌一が高利貸しをしていたわけではない。経済学者として金融システムを研究していた。1969年から94年まで大阪大学経済学部で金融分野を担当した。94年には自分が絵を描いて創設した国際公共政策研究科に移り、98年に転出するまで「国際公共政策」について考え続けた。

蠟山昌一の研究は多岐に及んだ。その概要は『大阪大学経済学部50年史』(2003年9月)にも紹介されているが、ここではそのごく一端、蠟山昌一が友人のトム・カーギルと書いた Thomas F. Cargill and Shoichi Royama, *The Transition of Finance in Japan and the United States: A Comparative Perspective*, Hoover Institution Press, 1988 に触れておきたい。

2人の著者はこの本で、日米の金融市場改革の実態を明らかにし、比較分析を通じて将来への展望を語っている。2人がまず共通の認識としているのは、金融機関、金融商品、金融市場、金融規制、金融政策、金融制度をすべて含めて「金融システム」として捉える視点で

ある。これは蠟山の視点であり、旧来の金融論が個別の銀行論であったり、金融制度論であったりしたところから脱して、金融分析に広い意味での一般均衡論的相互依存関係の視点を持ち込んだ。

その上で、著者たちは日米において金融システム変革を促した要因を、実物要因、金融要因、非経済的要因の側面から分析した。アメリカの金融システム改革は1970年代に急激に進んだ。その背景には、1930年代大不況時代からの金融規制の遺産、1965～80年の石油ショックその他の外的要因に基づく実物部門の不安定化と貯蓄貸付組合（S&L）危機のような金融部門の不安定化、高まる金融リスクに対して遅れる金利規制の動きなどがあった。結果的に規制金利と非規制金利との格差は次第に大きく開いていった。

他方日本では、73年の第一次石油ショックまでの高度成長を銀行ローンでまかなったが、石油ショック以降実質経済成長率が低下した。安定成長から低成長にかけて、資金循環の形態が変化した。75年以降政府の国債発行が増加し、政府が最大の負債部門として登場してきた。国債発行の増加に伴い、国債市場の自由化が必要となった。いずれの国においても、資金循環パターンの変化と旧来からの金融構造との間に制度的軋轢が生じ、それが金融改革の起爆剤となった。

しかし、金融制度改革の性格は両国間で大きく異なっていた。アメリカの金融規制改革は、長期にわたる制度的慣性の後、急激に、不連続的な形で行われたのに対して、日本の規制改革は関係者の合意をとりつけながら、漸進的、連続的に行われた。アメリカの金融改革では、金融技術の発展が規制を骨抜きにするなど、技術革新が中心的な役割を果たしたのに対して、日本では、オープンな市場形態よりも相対的な間接金融方式が優位であったため、技術革新の影響は限られていた。また、80年代のアメリカは、世界経済の中での相対的地位を低下させるなど対応すべき課題が大きかったが、80年代の日本は石油ショックを乗り切って安定成長を続け、むしろアメリカ経済の競争力を脅かす存在であった。

ここに要約したような分析を通じ、最終的に著者らは、アメリカの金融改革の将来は不確実性に満ちているが、日本の金融改革は、規制の慣性が強いこと、安定成長下にドラスティックな改革が不要であること、アメリカの貯蓄銀行のような弱点を抱えていないことから、より着実に連続的だろうと予測した。

この本で蠟山はトムの立論に持論を譲っている。蠟山昌一は、直接金融から間接金融へ、相対取引から市場取引へ、規制金利から自由金利へという市場型金融システムへの転換の必要性を主張していた。それがこの本では、トムに遠慮してか、日本の漸進性を評価している。

しかし、時代は進んでいった。80年代末に日本はバブル経済を経験し、90年代に入ってからバブルの崩壊と同時に、金融システムの脆弱性が一気に噴出した。もしも蠟山昌一が主張していたように、銀行が規制に従いつつ横並びの貸し出し行動に走るのではなくて、多数の参

加者からなるオープン市場での自由な取引を増やしていたならば、バブル心理は中和される部分があったかもしれない。

蠟山昌一は、その後も90年代以降の日本の金融改革の中心的論客であり、政府諮問委員でも中心的役割を果たし、いかんなく「やくざ」振りを発揮した。98年には「金融システム改革法」(金融システム改革のための関係法律の整備等に関する法律)が施行された。この法律は、フリー・フェア・グローバルをキーワードとして、日本版金融ビッグバンの中心をなすものとみなされた。

しかし97年の北海道拓殖銀行、98年の日本長期信用銀行の破綻など大手銀行の破綻が相次ぐと、金融再生法、金融早期健全化法が制定され、金融制度政策の関心は、不良債権処理と金融機関の再編成に移っていった。

かつて80年代、世界の金融機関の預金残高トップには日本の大手都市銀行がずらりと名を連ねた。2000年以降、日本の金融システムがバブルの後遺症から「漸進的」にしか立ち直れないでいる間、米欧の金融機関は情報通信技術を駆使したグローバル化、多角化によって、世界中の市場を活用したダイナミックな金融活動を展開している。

この現状を蠟山昌一は、あの世から切齒扼腕、悲憤慷慨しながら見ていることだろう。それとも、蠟山昌一の知恵を生かしきれなかったこの国の政府や業界にはさっさと見切りをつけ、椎間板ヘルニアが治ったと呵呵大笑しながら、新しい世界でバイクに乗り、カンパチを釣り、「上海帰りのリル」と鍋奉行で友人を辟易とさせているだろうか。今はただ冥福を祈るのみである。合掌。